

竹川病院

症 例 概 要 当院は重症患者を多く受け入れており、経鼻経管栄養や嚥下調整食を必要とする嚥下障害患者が多数入院しています。当院の言語聴覚士は「口から食べるをあきらめない」をスローガンに、日々より良いリハビリテーションを提供していますが、病前と同等の機能回復は時に困難な場合もあります。食事に制限が残ると、患者さんのQOLは大きく低下することがあります。例えば、ご家族やご友人と過ごす際、食事を共にすることは非常に多いものです。ランチしたり、カフェに入ったり、ご自宅にデザートを持ち寄ったり。つまり、食事は生きていくための栄養を確保するだけにあるのではなく、その人らしい活動・参加へ大きな役割を果たします。「たけのこの里」では発足以来、コロナ禍を除いて毎年、日帰り旅行計画を立て、旅行に出かけています。日頃外出の機会が少ない方、遠出やご家族だけの外出は不安、入院中の仲間と交流を続けたい方など多くの会員が参加し、スタッフは様々な障害を持つ方のサポートを行います。近年では嚥下障害を持つ方が会員になることが増加し、外食の不安を持つ方が参加する機会が増えました。これまでは作業療法士が中心として行ってきた行事でしたが、言語聴覚士が参加するようになり、より多くの対象者をサポートできるよう、アップデートを続けています。

内 容

「たけのこの里」は、当院を退院された患者さんで構成された会です。車椅子や装具を使用し、杖で移動される方々でも外出機会が持てるようリフト付バスを手配するなど、活動・参加をサポートしています。これまでは身体障害や高次脳機能障害を持つ会員が中心でしたが、近年は嚥下障害患者の増加に伴い、昨年度から嚥下障害のある会員が参加するようになり、サポートメンバーも医師、看護師、理学療法士、作業療法士、さらに言語聴覚士が加わることで、より専門的かつ包括的な支援体制を構築しています。

先日行われた日帰り旅行では、嚥下障害をお持ちの2名の会員が参加されました。言語聴覚士は事前に2名の詳細な情報を把握しました。A氏は、単独参加であり、水分にトロミが必要で高次脳機能障害も併発しています。B氏は十分な咀嚼が必要なため食事に時間を要するものの、リスクの高い食品はご自身で判断でき、かつご家族と参加との情報でした。トロミ剤の準備を含め、これらの情報を医師や看護師と綿密に共有しました。当日、A氏から「半年ほど前からトロミ剤を使用していない」と自己判断でトロミ剤の使用をやめたと受け取れる発言があり、この重要な情報も直ちにスタッフ間で共有し、警戒体制を強化しました。今回の旅行の昼食はバーベキューで、参加者一同非常に楽しみにしていました。サポートスタッフは、単独参加で高次脳機能障害があり、さらに自己判断でトロミ剤の使用を中止してい

たA氏に対し、食事中のリスクが高いと判断しました。そのため、言語聴覚士がA氏の隣に、医師・看護師が後方に配置し、すぐに介入できる体制をとりました。水分摂取時を中心に注意深く見守っていたところ、突然A氏が会話せずうつむき始めました。声をかけるとなずくものの発声はなく、鼻汁が見られたため、言語聴覚士が「声が出ますか?」と近づき呼吸を確認したところ、狭窄音を確認され、喉に何かを詰まらせていると判断しました。直ちに医師・看護師を呼び、多職種が連携して背部叩打法、ハイムリック法を施行しました。他スタッフはパルスオキシメーターなど必要な物品を迅速に準備。その間にもA氏の唇は青紫色に変化しましたが、最終的に看護師が口腔内から約4cmのソーセージを掻き出し、最悪の事態を免れることができました。

今回の旅行から得られた学びは、活動の回数を重ねても予期せぬ事態が起こり得ること、そして参加者の状態によって想定されるリスクや準備内容が異なることです。A氏の窒息に即座に対応できたのは、サポートチームによる綿密な事前の準備と、多職種間の緊密な情報共有、そして何よりも「患者さんの安全を最優先する」というチーム全体の強い意識と連携があったからこそでした。A氏は単独参加でしたが、同時期に入院していた他の患者さんと友情を育み、「たけのこの里」での交流を毎回楽しみに参加されています。この会はA氏にとって、そしてその友人にとっても、かけがえのない大切な機会です。私たちは、嚥下障害を含む様々な障害を理由に「やりたいこと」を諦めることがないように、今後も事前準備や多職種連携を怠らず、一人ひとりの患者さんへの深い愛情と親身な対応をもって、この会の継続を目指していきます。この活動を通じて、患者さんが地域で自分らしく生活できる喜びを分かち合えるよう、チーム一丸となって尽力してまいります。また、今回の旅行には、今年入職した1年目スタッフも参加しました。就職活動中にこの家族会の取り組みに感銘を受け、当院を志望した経緯があり、実際に患者さんに関わる機会を得て多くを学んでいました。全床回復期病棟でありながら、生活期に近い患者さんの支援にも関われる当院の特性は、患者さんにとってもスタッフにとっても魅力的であり続ける要素だと感じます。